

**主 題：あなたはクリスチャンと呼ばれていますか？**

**聖書箇所：使徒の働き 11章 19－30節**

**テーマ：あなたはキリストの証人ですか？**

きょうは使徒の働きの11章から“あなたはクリスチャンと呼ばれていますか？”というタイトルでメッセージさせていただきます。

初めに、皆さんに一つ質問をさせてください。あなたはクリスチャンですか——、はい、ありがとうございます。イエスと返ってきました。では、私はクリスチャンですよということを言わないで置いて、それでもあなたのことをクリスチャンですよと言う人はどれぐらいいるのでしょうか？きょうはそのことを考えながら、みことばから学んでいきたいと思えます。

この使徒の働き 11：19－31は、アンテオケという場所のお話が記されています。レジメに地図を入れさせていただきましたが、エルサレムの北側に500キロほど行った町のお話です。紀元1世紀の地図ですが、このアンテオケという都市は、世界で第3位の巨大都市でした。人口は約50万人です。アンテオケは国際交流都市でもあり、多くの外国人が集まる場所でもありました。そして本格的に異邦人への福音伝道が始まったのもこのアンテオケからです。

きょうのテキストには「キリスト者」と書かれていますが、このクリスチャンということばは、「キリスト」ということばともう一つは「～に属すること」とか、「～の所有になること」ということばが合わさってできたことばです。当時、アンテオケの人々の間ではギリシャ神話のダフネ神が信仰されていました。そして、アンテオケの人々は、ほかの地方で信仰されている異教徒たちがやって来るのですが、その人たちを揶揄して、「～イアン」という呼び方をしたのです。クリスチャンもその中の1集団でした。そして特筆すべきある特徴があったので、アンテオケに住む人たちは、イエス・キリストを信じる人々のことをそのように呼んだのです。そしてこのことばは、ここアンテオケから世界中に広がって、そして2000年たった今、私たちも自分たちのことをそう呼んだり、また呼ばれている人たちもいます。

このクリスチャンということばは、ただ日曜日に礼拝に行っているだけで言われたものではありません。今の世の中では、当時クリスチャンと呼ばれた人々が持っていた重要な意味の幾つかが失われつつあると私は感じています。それほどクリスチャンということばは、誰もが自由に解釈でき、またそう宣言できることばになっています。だからこそクリスチャンとは、どういう人たちのことを表しているのか、どういう人たちがそう呼ばれてきたのか、それを学びたいと思っています。

きょうはこの11章から、アンテオケ教会の始まりを通して、教会の成長で最も大切なポイントとクリスチャンと呼ばれた人々の五つの特徴について学んでいきたいと思えます。そして日々の礼拝生活において、主にある励ましを受けつつ、当時の人々のように本当の意味でそう呼ばれるクリスチャンを目指そうと決意を新たにしたいと思えます。それではまずきょうのテキストをお読みいたします。

### 使徒の働き 11：19－31

「：19 さて、ステパノのことから起こった迫害によって散らされた人々は、フェニキヤ、キプロス、アンテオケまでも進んで行ったが、ユダヤ人以外の者にはだれにも、みことばを語らなかつた。：20ところが、その中にキプロス人とクレネ人が幾人かいて、アンテオケに来てからはギリシヤ人にも語りかけ、主イエスのことを宣べ伝えた。：21そして、主の御手が彼らとともにあつたので、大ぜいの人が信じて主に立ち返つた。：22この知らせが、エルサレムにある教会に聞こえたので、彼らはバルナバをアンテオケに派遣した。：23彼はそこに到着したとき、神の恵みを見て喜び、みな心が堅く保つて、常に主にとどまっているようにと励ました。：24彼はりっぱな人物で、聖霊と信仰に満ちている人であつた。こうして、大ぜいの人が主に導かれ

た。:25 バルナバはサウロを捜しにタルソへ行き、:26 彼に会って、アンテオケに連れて来た。そして、まる一年の間、彼らは教会に集まり、大ぜいの人たちを教えた。弟子たちは、アンテオケで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった。:27 そのころ、預言者たちがエルサレムからアンテオケに下って来た。:28 その中のひとりでアガポという人が立って、世界中に大ききんが起これと御霊によって預言したが、はたしてそれがクラウデオの治世に起こった。:29 そこで、弟子たちは、それぞれの力に応じて、ユダヤに住んでいる兄弟たちに救援の物を送ることに決めた。:30 彼らはそれを実行して、バルナバとサウロの手によって長老たちに送った。」

#### A. アンテオケ教会のはじまり 19-30節

まず全体を通して、このアンテオケ教会の始まりについて見ていきたいと思います。

##### ・迫害によって 19節

19節を見ると、アンテオケにみことばが伝えられたきっかけになったのは、「ステパノのことから起こった迫害によって」と記されています。ステパノに起こった殉教の記事は、使徒7章に出てきます。ここでステパノがあるメッセージをしています。対象は、イエス・キリストを信じようとしないうダヤ人のリーダーたちに対してです。ステパノは、このユダヤ人のリーダーたちに対して、あなたたちはいつも聖霊に逆らい、旧約聖書に預言されていた救い主イエスを殺し、律法も守っていないということを突きつけました。そしてそれを聞いたユダヤ人のリーダーたちによって、彼は石打ちにされ、初めの殉教者になりました。その日を境にイエス・キリストを信じる人々の集まりだったエルサレム教会に対して激しい迫害が起こり、使徒たち以外の人々は諸地方に散らされて、彼らはみことばを宣べ伝えながらめぐり歩きました。そして、このアンテオケにもやって来たというわけです。地図を見ると、フェニキヤ、キプロス、アンテオケという町が出てきています。彼らは福音を宣べ伝えながら非常に遠い距離を歩いたのです。キプロスは、左側に見える島です。そしてラオデキヤの南側、ペリトウスという町から少し北側にある沿岸部のことをフェニキアと呼びます。彼らは陸路や海路を通して、さまざまな地方へと福音を携えてめぐり歩いて行きました。

##### ・異邦人の救いについて 19節

さて、19節に異邦人の救いについても記されているので、次はそこを見ていきたいと思います。彼らはユダヤ人にしかこの福音を、みことばを語りませんでした。それは真の神様を信仰していたのは彼らユダヤ人だけだったので、救われるのはユダヤ人だけだと思っていたからです。また神殿もエルサレムにあるし、直接神様から律法を受け取ったのはユダヤ人だけだからという理由で、彼らはユダヤ人にしかみことばを語っていません。ところが、11章の前の10章を見ていくと、ローマの百人隊長コルネリオの救いについて記されています。その救いを皮切りに、ユダヤ人以外の異邦人にもイエス・キリストを信じる信仰によって救いにあずかることが明らかになってきます。11章の前半は、それは食べてはいけないとされていた生き物を、神様がペテロにそれをほふって食べなさいと言われた有名な幻についての説明が記されています。神が清めたものを聖くないと言ってはいけないですよと、神様がペテロにそのような幻を見せられました。異邦人も信じる信仰によって救われるということです。

しかし、アンテオケに逃れてきた人々は、まだこのことを知りません。初めユダヤ人以外の人々には誰にも福音を語らなかつたのは、そういう理由です。しかし、見ていると偶然のような感じがしますが、実は神様の導きなのです。彼らはギリシャ人にも福音を語りかけました。すると、彼らは主イエスを信じ、多くの人が救いにあずかったとあります。神の救いはユダヤ人だけでなく、すべての人にイエス・キリストを信じる信仰によって与えられます。ここアンテオケでも、国籍に関係なく多くの人が救われました。

##### ・バルナバの派遣 22節

次に22節を見ていきたいと思います。ここではバルナバという人が出てきます。アンテオケで多くの人々が救いあずかったことがエルサレムの教会に知らされた時、教会は使徒の代理人としてバルナバ

を派遣しました。それは、アンテオケの信仰者を教え、励ますためです。バルナバは初めイエス・キリストを信じる人々の迫害者だったパウロ、ここではサウロと出てきますが、このサウロが悔い改めてイエス・キリストを信じるようになった回心が本物であることを使徒たちに説明し、納得させた人物です。それが9章に出てきます。また、4：36では、バルナバは「慰めの子」というニックネームで呼ばれているのですが、本名はヨセフ、キプロス生まれのレビ人であったということが記されています。

どうしてエルサレムの教会は、アンテオケの新しい信仰者の集まりにバルナバを派遣したのか——。ここにも神様のご配慮が見られます。バルナバはこのニックネームにあるとおりの信仰者だったからです。この「慰め」ということばの語源は、「そばに呼ぶ」という意味です。そこから「勧める」、「励ます」、「力づける」、「慰める」という意味になっています。まるで親が子どもを呼び寄せて慰めたり、励ましてあげたりしながら成長を促すような光景が浮かんできます。事実、きょうのテキストでも、23節を見ていくと、彼が喜んだこと、そして励ましたことが記されています。バルナバは、異邦人が偶像礼拝から立ち返って、真の神を礼拝する姿を見て喜びました。そして「みなが心を堅く保って」、それは心が揺れ動かされることのないように主イエスに従うという決意のことを表しています。そして「常に主にとどまっているように」とあります。この「とどま」というのは、「～にとどまる」、「～に残る」ということばの前に、「～の近くに」とか「～の中に」ということばが合わさっていることばです。これが現在形で書かれているので、いつもイエス様の中にい続けましようねということです。それはイエス様の愛のうちにとどまるということ、主の命令を守り続けるということです。バルナバは人々をそのように励ました。励ましを中心は常にみことばであり、主イエスでした。アンテオケの信仰者が信じて間もない若い信仰者の集まりだったゆえに、間違った教えに惑わされないか、また、この世の生き方に戻ってしまわないか、バルナバは親代わりのように教え励ました。エルサレム教会の人選はすばらしいものでした。

そしてさらに24節には、「彼はりっぱな人物」だったということが書かれています。そして「聖霊と信仰に満ちている人であった」とあります。ここに書かれている「りっぱ」ということばは、見た目が綺麗とかではなくて、「内面が正しい」ということです。彼はすばらしい人格者だったのです。そして何よりも聖霊とみことばに従う信仰者でした。多くの人々が主に導かれていきました。

教会の成長を私たちに置きかえて考えてみたいと思います。教会の成長には、そのようなリーダーが必要不可欠です。ここでもみことばを正しく教え、模範を示し、寄り添い励ますリーダーが描かれています。誰でも、どんな人でも、初めは霊的に弱く、幼いのです。そして何が正しいか、また何が神様に受け入れられるのかもわからないのです。それをみことばから学び、具体的に考え方や生活に適應していく、そのようなことをしていくにはとても時間がかかります。若い教会ならなおさらそのような人々が多いと思います。成長したクリスチャンは、ほかの人を教えたり、励ましていきます。この浜寺聖書教会もそんな教会であり続けたいと思いますよね。

#### ・パウロ（サウロ）の協力 25節

次に25節では、パウロが出てきます。まだサウロと呼ばれている時ですが、パウロの協力が25節に記されています。バルナバは、同労者——同じような働きをする助け手として、パウロを呼びにタルソに向かいました。余りにも新しくできた集まりだし、人数も多かったからです。パウロはイエス・キリストに出会って、悔い改め、イエス・キリストを信じた後、エルサレムに行き、ユダヤ人の迫害に遭いました。そしてカイザリヤから送り出されてタルソに帰っていました。このお話はそこから9年後の話です。エルサレム教会に救援を求めればいいのに、どうしてバルナバはタルソのパウロに決めたのでしょうか？それはバルナバとパウロが顔見知りであったことはもちろんですが、何よりもバルナバは神様が計画されたパウロの異邦人に対する働きということを知っていたからです。それが9：15に出てきます。そのお話をバルナバも聞いていたのです。アンテオケ教会は、異邦人伝道の拠点となった場所です。異邦人の使徒と称されたパウロは、同労者として適任でした。

## ・聖霊の導きとみことばの学びと実践 26節

次に26節に目を向けていくと、ここでは聖霊の導きとみことばの学びと実践について書かれています。きょうのテキストでは、少なくとも四つ神様の導きを示唆している箇所が出てきます。少し戻って、21節を見ると、「主の御手が彼らとともにあった」と出てきます。聖書中、この神の「御手」ということばはたくさん出てきますが、この表現は「神の力」や「神の不思議」、「神の導き」を表したり、「さばき」を表しています。人々の救いには神様の導きがありました。23節をには「神の恵みを見て」とあります。人々の回心、悔い改めは、神の恵みの結果でした。神の恵みは見える形として、神様を礼拝する者に変えられた、そのように現れました。24節を見ると、「聖霊と信仰に満ちている人であった」と、バルナバの紹介文に記されています。バルナバはいつも神様に信頼し、みことばを忠実に言う人でした。28節を見ていくと、ここでは「御霊によって預言したが」とあります。預言者たちは御霊によって預言した。預言者は神様のご計画やみことばを運ぶ人々です。教会の形成には神様の働きが欠かせません。神様、聖霊の働きがなくては誰も救われることはないし、もちろん霊的に成長することもあります。成長するには、ひとりひとりが聖霊に従う必要があるのです。

Iコリント3：6-7にはこう書かれています。「6 私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。7 それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。」と。私たちは神様の助けを日々求めていく必要があります。教会のリーダーたち、ひとりひとりが正しい判断をできるように、そしてみことばによるリードができるように、また、ひとりひとりが主にあって成長し続けていけるように、神様が働いてくださるように、私たちはもっと祈る必要があります。教会の成長を握っているのは神様です。そしてこの26節にはバルナバとパウロはまる一年の間、大ぜいの人たちを教えたとあります。ここでキーとなることばは、「弟子」ということばです。「弟子たちは、アンテオケで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった。」、この「弟子」ということばは、イメージどおりだと思のですが、「生徒」や「門下生」、つまり「教えを受ける人」という意味があります。また、この「弟子」の語源には、「習慣にすること」、「使用や実践によって学ぶこと」という意味があります。使うことやそれを行うことによって学ぶという意味です。アンテオケ教会の人々は、バルナバとパウロを通し、教えてもらったみことばを学びました。記憶し、理解したのです。そして、それを実践して成長していきました。

私たちは今、コロサイ人への手紙を学んでいます、その3章にこのように書かれています。「16 キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。17 あなたがたのすることは、ことばによると行いによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。」と。どうすれば互いに教え、戒め合うことができるのでしょうか？ひとりひとりがみことばを学び、理解し、そして生活に適應して歩む時、次第に成長し、お互いに教え合い、また戒め合い、教会は加速的に成長していきます。まるで主イエスのような考え方をし、行動するアンテオケの教会の人々、そんな彼らの態度や行動を見た周囲の人々が「キリスト者」、クリスチャンと彼らのことを呼んだのです。

### B. キリスト者と呼ばれた者の特徴

次に残りの時間で、そのキリスト者、クリスチャンと呼ばれた人々の五つの特徴を見ていきましょう。レジメには英語の表記で書かせていただいています。そして、ギリシャ語の時制のリストが挙がっています。それぞれ一つ一つ見ていきたいと思います。

#### 1. 主イエスを信じた者 21節

21節に「大ぜいの人々が信じて」とあります。この「信じる」ということばは、新約聖書中にたくさん使われていることばですが、「ピステウオー」ということばです。(レジメにあるG4100というのは、ストロングナンバーというギリシャ語一つ一つに割り振られている番号です。このことばが使われている

箇所がリストで出てくるので、学ぶ時に非常に役立つ番号です) この“ピステウオー”というのは「信じる」とか、「信用する」、「信頼する」という意味があることばです。ヨハネの福音書の1:12にこのように書かれています。「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」、私たち、よく聞く箇所だと思います。「その名を信じた」、ここが同じことばです。「その名」ということについて知っておきたいと思います。この「名」ということばは、その人の権威や人格を表すことばです。すべての人格、そしてすべての権威を表しています。イエスの「その名」には何が含まれているのでしょうか？イエス様のお名前は「救い主」を表しています。イエス様は神様です。そのことも含まれています。クリスチャンとは、主イエスを信じる者です。救い主として信じ、そして神として信じる者たちのことです。

## 2. 神に立ち返った者 21節

同じく21節、同じ語がIテサロニケ1:9に出てきます。この箇所は悔い改めについてわかりやすく教えている箇所です。「私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり」、この二極性を表しているのです。何に信頼していますか？偶像ですか？それともまことの神ですか？この「立ち返って」ということばは、「～を超えて」とか「～の上に」ということばが前にあって、その後ろに「向きを変える」とか「考えを変える」ということばがついていることばです。すなわち、これは「まわって完全に向きを変える」という意味です。こっちを向いていた人が完全に向きを変えて、こちらを向くという話です。そしてそれは、からだだけではなく、心をも表しています。逆転して完全に向きを変えるという意味があります。180度向きを変えるのです。このことばは、しばしば悔い改めの説明として用いられています。例えば、使徒3:19では「そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。」と書かれています。

また、福音を信じることと悔い改めは別々のことではないことがわかります。使徒14:15にはこのように書かれています。「言った。「皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私たちも皆さんと同じ人間です。そして、あなたがたがこのようなむなしいことを捨てて、天と地と海とその中にあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです。」。福音は、信じる人を必ず悔い改めへと導いていきます。そのような神の力なのです。福音は、ただ十字架と復活だけを信じていればよいというものではありません。自分中心の生き方を捨て、神に従う決意を含んでいます。なぜなら主イエスは私の救い主であると同時に、私の神だからです。救い主だと信じるけれども、神だとは信じたくありません、私は従いたくはありません。そんな福音は存在しないのです。

## 3. 神に導かれた人 24節

この「導かれた」ということばは、「～に加えて置く」、「加える」、「足す」という意味があります。語源は「～の近くに置く」という意味です。このことばは、「加えられた」と訳すことができます。そしてそれは受け身で書かれています。誰によってかと言うと、神によって加えられたのです。これは神の恵みによって救いを受け取った人ということを表しています。自分の行いによるものではありません。救いは完全に神の主導的な働きです。私たちもよく暗唱する箇所ですが、エペソ2:8-10にこう書かれています。「:8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。:9 行いによるものではありません。だれも誇ることのないためです。:10 私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」。救いは完全に神様の働きです。アンテオケのクリスチャンの人々も例外なくそうでした。

## 4. キリストの命令を守り行う者 29-30節

29節の終わりの方に「救援の物を送ることに決めた」とあります。この「決めた」ということばは、「～しよう」と公に決意する」という意味を持っています。そこに犠牲が伴うとしても、よく考えた上でそれを実行しようとしたのだということです。そしてそこには一致がありました。みながそうしようと決めたと。彼らキリスト者は、自分自身のことよりもキリストの命令を優先したいと決めました。キリストの命令はどんな命令だったのでしょうか？ヨハネ13：34-35に「:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。:35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」と書かれています。今、私たちが月のみことばで学んでいることです。ここにききんのこと書かれました。このききんは、歴史家ヨセフスによれば、紀元46年に起こったと記されています。そして、彼らが救援の物を送ったのが紀元48年です。先にエルサレムの教会の人々の食糧が尽きたのでしょうか。しかし、アンテオケの教会の人たちもあり余っているわけではありません。蓄えが少なくなり、自分たちも苦しいけれども、彼らは神様の命令を優先させ、兄弟姉妹への愛を実行に移したのです。この神様の愛の実践のあかしこそ、まばゆい光としてアンテオケの人々を照らし、そして彼らは言ったのです、「あの人たちはキリスト者だ」、ほかの人と違うと。

マタイ5：13-16にはこのように書かれています。「:13 あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。:14 あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。:15 また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。:16 このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」と。アンテオケ教会のクリスチャンたちは、こんな塩けに満ちていたのです。皆さん、塩を何に使います？味をつけ、おいしくするために料理に使いますよね。また、魚の臭みを取ることもできます。とても役に立つミネラル分です。そして塩は周りに影響を与えるのです。周囲の人々に影響を与えるということを表しています。

そしてもう一つ、人々の前に光り輝いたとあります。周囲を明るく暖かくし、そして闇である罪を明らかにします。そのような存在でありなさいと言われているのです。私たちがそんなキリスト者、クリスチャンでありましょう。まずは教会の中で、そしてきょうから始まる教会の外で一週間、犠牲を伴ったとしても、互いに愛し合う。犠牲にはいろいろな種類があります。時間である場合もあるかもしれない。また、お金である場合もあるかもしれない。そのようなあらゆる犠牲を考えた上でも、互いに愛し合うということを実践しようということです。まず、相手の必要を知って、その必要を満たそうと行動する。その前に決意して行動することが大事です。私たちがそんな光として光り輝いていきましょう。

## 5. すべてのキリスト者は弟子である 26節

同じく26節からですが、「弟子」ということばをもう一度見たいです。もし私たちの信仰告白がイエスを信じ従うと言うのなら、すべての人はキリストの弟子です。先ほど「弟子」とは教えを受ける人だと学びました。イエス様が天に上げられる時に、大命令を記してくださっています。それはマタイ28：19に記されています。この大命令は「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、」と書かれています。また、ヨハネ15：7-10に「:7 あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。:8 あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになるのです。:9 父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。:10 もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです。」と。「多くの実を結び」とありました。行動に現れているのです。た

だ単に心の中で思っているだけではなくて、外に現れて実を結んでいます。そして弟子となることによって、神の栄光を現すのだと書かれています。「わたしの父は栄光をお受けになるのです」と。私たちクリスチャンが救われた目的は、神様の栄光を現すためです。そのためには、弟子となり、実を結んでいく必要があるということです。弟子は主であるイエス様の戒めを守り行います。それは主イエスを愛することで、神の栄光を現すことです。もう一度言いますが、よく覚えておいてほしいです。弟子の目的は神の栄光を現すことです。そのために、私たちはイエス様の戒めを守り行うのです。

最後、まとめとして、締めくくりたいと思います。「あなたはクリスチャンですね」と呼ばれたことがありますか？確かに私はクリスチャンだと自覚しているし、周りの人たちにもそう言ってきました。ここに書かれているアンテオケの教会の人たちには、ききんがあったことはとても大きなチャレンジでした。私たちの周りでは余りききんというのはありません。なかなかそういうチャレンジはないかもしれないけれども、愛を示すチャレンジは日々あります。どのようにしてキリストの愛を世の中に現していくのか？家族や職場の同僚たち、また隣近所の人たちに、私や私のことばや態度を見て、その人たちは間違いなくこの人はクリスチャンだと言ってくれるのだろうか？そのことを考えてみてほしいのです。この人は間違いなくクリスチャンだ、ほかの人とは違くと、いつも言ってくれるだろうか？私たちクリスチャンは、世の光として、神様の栄光を現す存在です。何をするにも、どんなことでも主によって行います。本当の意味でクリスチャンと呼ばれるために、これからもみことばを実践し、世にあかししていきたいですね。そして、それを見た人々に神様の愛をあかししていきましょう。

この12月、クリスマスです。たくさん機会が神様の恵みとして、私たちに与えられています。伝道の機会として、そしてあかしの機会として用いていきたいと思います。